

工芸品(施設なし) / 会津漆器

会津地方は 400 年以上にわたって高品質な木製漆器の産地であり、その起源は二人の藩主の努力にありました。蘆名盛信(1408-1451)は漆の原料となる漆栽培を奨励しました。さらに蒲生氏郷(1556-1595)が木工職人を会津に招き、漆器産業を確立させました。歴代の天皇の支援により漆器の生産が盛んになり、会津の職人たちは木工や漆塗りの技術を磨き上げていきました。

現在、独特のデザインから会津の漆器は会津塗と呼ばれ、1975 年に日本の伝統工芸品に指定されました。

伝統工芸で使われる木製品は大きく分けて、お椀などの丸いものと、お盆や箱などの平らなものがあります。しかし、最近では工芸の魅力を広げるために、布や金属、ガラスなどに漆を塗り、さまざまなアクセサリーを作る職人もいます。漆を何層にも塗り重ねた後、色漆と金粉や銀粉を使って手描きで複雑な図柄を仕上げます。松や梅、竹、破魔矢(縁起の良い矢)などが代表的な図柄です。会津若松市内各所では、漆器の絵付けを体験することができます。